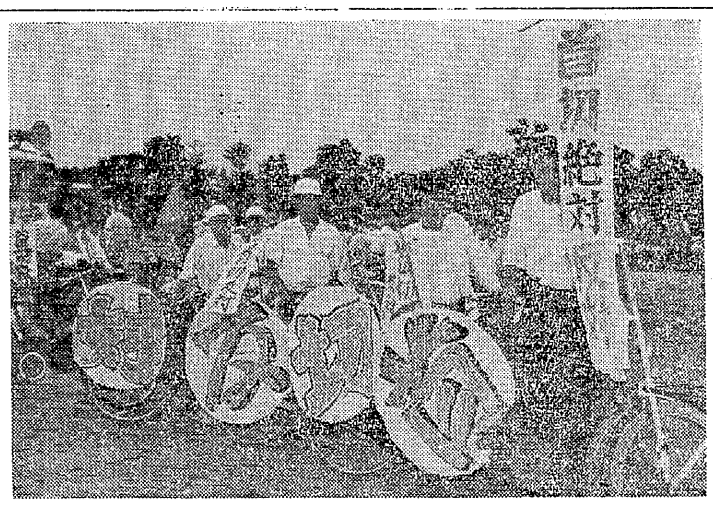
攻撃の本質を見極めよう

企業合理化は不況のしわよせだ

労働者は赤字の責任者でない

不況のしわよせの一切をわれわれにおしつけようとする企業合理化の攻撃をはね返えすため、三鉱連では十一月十八日から臨時大会を招集し、全六山の統一した反撃態勢の確立を期している。三池ではいま交流情宣を実施し会社の攻撃の本質をあきらかにし、闘う態勢づくりのための懸命な努力をつづけている。編集部では、直接交流情宣にあたつている方々に集つていただいて、会社の赤字宣伝の実体や、組合員、家族の闘いにたいする認識などについての座談会をひらいた。座談会では不況にたいする理解が不十分であることが強調された。以下はその座談会の一部を要約したもので、こんご職場地域での話合いや討議の参考資料として紹介する。



首切り反対を叫び笹林公園に集つた自転車デモ隊

不十分な不況認識

司会　われわれは会社の企業合理化の攻撃にそなえて闘争態勢確立のために力を注いでいるのですが、不況ということが下部でどう受取られているか、これを皆さんは交流情宣の中からつかんでおられると思いますが。

A　まだ交流情宣をやつて日も浅いのですが、私の感じでは一般的に不況と会社の合理化を結びつけて理解していないようだと思つた。不況とは別個に会社の合理化が進められていると思つている。とにかく、三池は能率が悪く賃金は高く出勤率は悪いらしい、だから会社の建直しが出てくるというふうに浅くみている傾向がつよいようだ。不況問題と三井鉱山の合理化を正しくむすびつけてとらえていないようにみうけた。

私は情宣の半分を不況のことで説明したが、まず第一次と第二次大戦後の不況にふれ、第一次大戦後の不況で何故労働者が痛めつけられたか、それは労働者に力がなかつたからで、こんどは労働者が力をもつているので、労働者が不況の犠牲にされてはならないと話したが、この話はよく聞くが反響があまりでてこない。とにかく会社は三井鉱山の経営がわるいから、企業合理化するんだと宣伝している。

徹底した情宣を

司会　新聞にかいていた三池は三井のドラ息子ということに通じるわけですね。

B　まあそういうことですね。だからそういつた不十分な見方をなおす為の情宣が当面必要ですよ。

D　女の人の質問をきいていると、期末手当は不況だからどうなりますかが一番先にきかれる。炭労の長計闘争などはつきり分つていないようだ。

B　こんどの態勢確立についても、なんだかのんびりしているような感じをうけた。経済不況からくる全般的な資本家の攻撃と結びつけた理解をふかめないと、闘争をすすめる上に大きな欠陥になるのではないかと思われます。三池だけが闘うという孤立した闘いとしてとらえているようだ。これでは浅い闘いになつてくる。不況の中からくる合理化という感じをもつている人は少いという感じをうけた。

浸透しているP・R

司会　合理化を経済不況と結びつけないで経営の赤字だということに結びつけているようですね。

E　不景気は三井鉱山の経営内容からくると理解し経済的な全般的不況からくるとは考えていないようである。だから三井だけの問題として解決つければならないと思つているが非常に危険ですね。不況の本質をよく知らせる必要があるとつくづく感じた。

司会　私は三川に情宣にいつたが、私もそこに力点をおいて説明したが、この話はよくきくが反響があまりでてこない。とにかく会社は三井鉱山の経営がわるいから、企業合理化するんだと宣伝している。

ドラ息子と宣伝

F　最初からそういう面をもつていましたね。新聞や宣伝やらで三池の悪いことを読ませたり聞かされたりして、三井鉱山はどうにもならんと宣伝している。これがPRの中心になつている。

（上）24年賃闘で行商隊を組織し通行人に闘いを訴えた。
（下）ロツク・アウト下大砂の地域闘争本部

赤字論議はやめよう

H　赤字にたいする反撃をどうするかで私はあまり理屈をいつても何だから（1）いままで何べんも会社の決算報告をきいたが、その通りだと思つたことは一回もなかつた。どうしてもその通りだという確認は何度聞いてもついにできなかつた。（2）こんどの十九億円の赤字は積立金などは全部積立てた上で赤字の発表をしている。（3）トン当り経費にしても山元からの経理公開でなく、実体がどうしてもつかめない。こういうことを話しています。

C　赤字論議は単純にすべきでない。会社は赤字自体が問題で宣伝しているのでなく動揺をねらつているのだ。企業の立場からみれば赤字は問題だろうが、それにしても三井鉱山が継続しているのは儲かつているからだ。さらに独占資本の問題を無視してはならない炭鉱は赤字でも染料、薬品が儲かつていれば独占はなりたつ。炭鉱が赤字であればもう少し石炭を高く売ればよい。そうしないのは独占資本はどこで儲つても同じだからだし、どこででもべらぼうに儲けを上げようとしているからだ。

D　三井鉱山が赤字かどうかは他所の家が黒字かどうか分つていないのと同じように、当事者だけしか分らないことである。

大ピンチではない

F　赤字について何かもう少しわかるような説明はできないものかと考え、ころみに三井鉱山は資本金は三〇億円、だがバランス・シートは三百五十億円。つまり十何倍かの資本を出し入れしている。

こういうことから話をすると十九億円の赤字は大ピンチではないということがわかつてもらえた。

A　女の人からの質問だつたが非常に重要な質問があつた。それは不況下の労働運動と三井鉱山の再建云々はどういう関係がありますか、第二組合ができたらどういう影響がでてくるか。不況のときの期末手当闘争はどうなるかというのがあつた。

B　会社がストを恐れるのは生産をうしなうのが怖いのだ。第二組合というものは組合員の力を二分して、失われた生産をおぎなおうとするのがねらいなのだから、このことを説明しなければならないと思う。それから既得権防衛の言葉はわかつているが、それがわれわれの生活とどう関連をもつのか、この認識が非常に不十分で、これは情宣不足からきている。

司会　長計協定の理解が十分でなくて、長計協定を入替採用協定というふうに理解しているむきがあるようですね。

G　たしかに長計協定の内容というかその意義はよくわかつていないようですね。また会社を信用しすぎている。協定して判を押していると大丈夫と思つているのだろう。これは協定というものがどういう効力、変化性をもつているか、この説明をしなければ危険である。

E　闘いはパツとおきるものだと思つている。だから闘いがどの辺にきているかの認識が案外薄いと思う。闘いとは鉢巻をしめてワツとやるとだけしか思つていないようだ。

司会　金銭的にみて資本家の攻撃の本質を正しくとらえ、適格な反撃態勢をつくつていくためもつと十分な情宣が必要なようですね。

後退したら最後だ

七、八、九日は脱落者の第一組合員への働きかけを封じ、なお説得をかねて脱落者の家庭を訪問した十日朝五時四十分非常招集、これは脱落者が就労するもようがありこれを阻止するためである。再度警官の出動約一〇〇名位、話合いの結果集団入構を認めないということになり社宅外へ追放した。

このとき、社宅内に第一組合が向いあつているなかを（約一米の通路）脱落者は門外へでたが、ここを通るときは第一組合に脱落者は相当痛めつけられた。脱落者はそのピケのないところより、こそこそと入構したもようである。

こういうわけで工場内ではほぼそと生産がつづけられているわけであるが、どのくらいかというと生産は七日第一組合が全員構内に入り調べたところ一割五分から一割七分と推定される。なお、粗悪品で売物にならないとのことである。そのごは全員三方所にピケを徹夜で行つており、その中で学習がやられている。

三池を見習いたい

この王子製紙の闘いでも明らかのように、労働者の闘いに一歩後退二歩前進はないということである。それは賃闘で他社よりも低い回答を了解し、期末手当も了解し連繰（連続操業）さえ了解してもなお労協改憲を提案してきた。組合は賃金、期末、連繰は了解するから労協は話合いがつくまで現協定を延長してくれと、四歩も五歩も後退したが会社はマカリならぬ、全部同時解決と迫つてきて組合員の憤激をかつた。もつと会社が上手にきたらここの組合は会社に踏みにじられていただろう。三池では会社がどうでるか分らないが、ジワジワと職制を強化し既得権を剥奪してくる場合、最初に止めなくては一歩一歩押返され、最後に首切りまでくるのは明らかである。労働者はどんな小さな既得権でも守り抜かねば首切りは守れない。王子の労働者は炭労、とくに三池を見習うといつている。組合員各位が労働運動の先頭に立つものとしての自覚ある行動と、学習の中から労働者階級としての力強い闘いを起して下さい。

ときの焦点

台湾問題は大事件だ。この問題をきつかけにわれわれの目の前にはつきりしてきたことがある。それは世界の二つの大きな国がぶつかりつつあるということだ。アメリカは単に中国、ソ連を敵視しているというだけでなく、そのまわりを基地網でとりかこんだ。しかもそこには核兵器が待ちこまれている。平和の危機はギリギリのところまできているのである。核兵器基地の網の目は中国、ソ連をむいており、核兵器廃棄の権限は現地司令官にまかされている。非常にあぶない状態だ。

日本にも基地がある。それは中・ソを仮想敵とし防衛を口実としているが、中・ソは一度も日本を攻撃するといつたことはない。日本の基地にはまだ核兵器はないかもしれない。だが、いつでも持込めるようになつている。

戦争放火者になつた日本

岸は昨年台湾を訪問したとき蔣介石の大陸反抗を支持すると言明した。あとで「あれは失言だつた」といつたが実は本音だつたのだ。日本はアメリカの基地網に組込まれた。日本は戦争にまきこまれる危険がある、というがまだまきこまれていないと考えてはいけない。いままではまだ無理に基地を提供させられていたという口実もつくが、こんどの安保条約改定では、日本から積極的に基地を貸そうというのだ。これでは日本全体が中国を敵視していることになつてしまう。「対等」ということばにごまかされてはいけない。いまの状態で日米が対等の立場になりうるとは誰がみても考えられない。

日本はいまアメリカの対中国戦線基地になつている。条約改定で文章上は「対等」になつても保障占領という形で占領状態を継続することができるのだ。そうなれば国内に反対勢力が強くても、実際はアメリカ行の船上で〃中国に行くのだ〃と西にむかつて歩いているようなものだ。

日中関係の問題ではなく、世界の平和の問題であり、日本の独立の問題である。そしてそれはすべて日本側の根本的な態度いかんにかかわつている。日本が平和共存の政策をとるかどうかということである。

日本はいまちようど噴火山の頂きにあぐらをかいているようなものだ。いつふつとばされるかもわからない。中国敵視政策をやめろというだけではなく、基地撤廃の独立闘争が必要である。独立闘争は長くかかる。だがそれはやらなければならない。

中国の国連復帰はちかい将来実現するだろう。だがいまの岸政府ではそうなつても日中関係の正常化はできない。さんざん敵視しておいて、国連復帰おめでとうといつても受けつけられまい。岸政府ではダメだということはハツきりしてきた。いまこそ一人ひとりが岸政府は信任できないという意志を表明すべき時だと思う。

ピケの中で学習

爆竹にさつと流れる緊張

王子労組春日井支部に炭労オルグとして派遣されている永田（本所）井上（三川）両氏より、第一信に引つづき現地の形相をつぎのように知らせてきた……。

【第二信、十一月十一日現在】

会社、第二組合は六日午後一時十五分、再び出構を意図して構内へとくる。警官隊もそれと前後して約七五〇―八〇〇名出動。

第一組合の爆竹（緊急事態非常招集）により、緊張した空気がみなぎり、第一組合、主婦会一、二〇〇名、第二組合二五〇名が構門で激突、六回位もみあつた。井上敬宣部員とともに私（永田）は三回最前列に立つたが、胸を圧して呼吸ができぬ状態となり、最前列は足が宙に浮いた形になつてしまう。この時井上オルグは胸を打撲、負傷したがいまは全快して一緒に頑張つています。この時の状態は警察の出動で三時四十分中止、四時から再び始まつたが、炭労は全員最前列で闘つた。警察は前に十列横に四列、後に十列ぐらい囲んで出構を行おうとしたので、ピケ隊は全員座りこんだ。これには警察も困つたもようでついに破れなかつた。